

大学・学生・地域をむすぶ、まちおこし

関東学院大学昌子研究室が提案する コミュニティ・ビジネス

大学は地域の中にあっても、自主、自立の色彩が強く、学園祭や、市民向けの公開講座などがないと、外部の人々がなかなか内部に足を踏み入れる機会がない。大勢の学生が地域経済に及ぼす影響は大きいが、一般の人がそれ以外にメリットを感じるのは少ないのでないだろうか。

今回取材に訪れた関東学院大学は横浜市にキャンパスを置くが、横須賀市追浜地区に隣接する。職員、教員や学生の多くは横浜市側の駅を利用するので、追浜地区に対する関心や知識は希薄だった。ところが、あるきっかけから大学と地域の双方の交流が始まった。大学はアクセスしやすい身近な研究フィールドとして豊富で密接な情報が入手できるメリットを有し、地域はそれを市街地活性化の知恵袋として意見を聞く。双方がそうした関係を築き、着実に成果を実らせている。

地元の大学と意識していた 商店街関係者

追浜のまちづくりに取り組んだのは、社会環境システム学科の昌子住江先生が担当する「まちづくり起業入門」のゼミだ。ゼミを始めたのは四年前。都

市計画と土木史を専門とする昌子先生は、前半に基本的な計画理論や現実のまちづくりの状況を講義する。後半は学生がそれをベースに、実際の地域に関わってニーズを探り、その対応策としてまちの自立と存続に必要な独自に考えたコミュニティ・ビジネスを提案するものだ。初年は、対象地域やテーマを自由に選択する方式をとったのだが、全体に散発的な感じになってしまった。まとまりがなかつたという。

しかし次年度の二〇〇三年に転機が訪れる。昌子先生がある自治体の委員会でたまたま隣合わせた他大学の先生から、追浜の商店街の人が、「市街地活性化を大学と連携してやるのだった」と言えども、関東学院大学である。

昌子先生は、それまで他の大学関係者と同様に、あまり追浜を意識したことではなかった。しかし、この「地元の大学」という親しみの込められたひと言がこれまでのゼミの方針を変えたのだ。学生のリポートは、追浜という地域に限定して、さまざまなコミュニティ・ビジネスを提案していくことになつた。



高層の新しい校舎が整備された
関東学院大学の正門



関東学院大学と
追浜のまち

追浜のまちと 全国初の商店街ワイナリー

三浦半島の付け根に位置する追浜は、海側に広大な工業地帯を擁し、山側には首都圏のベッドタウンとして開発された住宅団地がある人口約三万人のまちである。工業地帯には、日産自動車を始めとする日本有数の企業や、世界的にも有名な海洋研究開発機構があり、史跡や遺跡もある。工場労働者や住民が日常的に利用する駅前の商店街は、主要道路である国道一六号線沿線に約一・五kmにわたって軒を連ねている。

しかし、ここ数年は商店主の高齢化や後継者不足などから、シャッターを閉める店が目立ち始めていた。

昌子先生はさつそく商店街関係者に会い、直接追浜のまちの歴史や特色、状況を聞く。そして、話からまちにはたいへんな宝ものが多く眠っていることを認識するのだ。

この話を聞いたのが〇三年七月、調査と授業が同時並行のゼミが始まった。

初年度の個別研究では、海洋研究開発機構が採取する海洋深層水に注目するものが多かった。その中でも、ゼミの非常勤講師を務め、ワイン醸造に詳し

い斎藤俊幸氏が提案した「海洋深層水を活用した商店街ワイナリー」が商店街の事業として実現することになった。

この事業の立ちあげの鍵は、酒税法の規制緩和だ。従来ワインを醸造するにはアドウ烟が必要だったのだが、濃縮果汁のみでも醸造免許が取得できるようになつたのだ。そこで海洋深層水という、ミネラル分が多く、雑菌も少ない安全な水が手に入りやすいという立地を生かし、商店街の特産物としてワイン醸造を提案したのだ。ワイン醸造を行う場所は商店街の空き店舗を活用した。

○四年十月には、地元商店街の有志が組織する「商盛会」の協力を得て空き店舗を改装したワイナリーとまちなか研究室「追浜こみゅに亭＆ワイナリー」というまちづくりの拠点がつくれた。一階はワイナリーと商品を売る店舗、二階は学生の演習や発表会の他、市民向けのパソコン研究会を開くなど、地域のコミュニティ・スペースとしても活用されるものだ。

一方、全国初の商店街の酒造免許取得は困難を極めた。しかも実際に作業するのはワインづくりに賛同する「ワイン研究会」のメンバー。全員が素人



追浜商盛会がつくったワイン。基本的に赤ワインのみで、原料である濃縮果汁の種類によって味わいを変えている



(上) 16号線に沿ってアーケードが続く駅前の商店街。所々にシャッターの閉まつた店舗がある

(左上) 2004年にオープンした追浜こみゅに亭＆ワイナリーの内部。以前は居酒屋だったところを改装。奥の厨房のあったところに醸造場所を配し、手前は作ったワインや地域の特産物を売るスペースにしている。右は片岡信幸さん、左は店番をする長野久美子さん

(左下) 前の店舗から数十メートル北に移した新しい追浜こみゅに亭＆ワイナリー。歩道に面して大きく開口部をとり、商店街を歩く人にも醸造作業が見られるようにしている。スペースも前の倍以上はあり、醸造タンクの容量も倍に増やして、増産体制を敷いている。右は片岡さん、左はワインづくり仲間の内野忠治さん



だつたので試行錯誤の連続だつたとい
う。初期のころから「ワイン研究会」
に入つていた片岡信幸さんは山側の住
宅地湘南鷹取の住人だ。サラリーマン
時代は地元のことは何も知らなかつた
が、定年後、この会があるのを知つて
参加した。ワインづくりは神経を使う
ことも多くたいへんだが、「おもしろ
いし、やりがいがある」という。それ
にこの会に参加したこと、追浜のま
ちのいろいろなお店を知ることができ、
知り合いや友人が増えたそうだ。商店
街を利用することの多い女性の口に合
うようにつくったという「おっぱまワ
イン」は昨年五月に販売開始。上々の
評判で、製造が販売に追いつかないほ
どだと話す。今年はもう少し広い店舗
を借り、道行く市民が醸造現場を見ら
れる新ワイナリーがオープンする。

評価を受ける 現実的な地域活性性プラン

一〇〇三年度から昌子ゼミでは、追
浜をテーマとして様々な地域活性化の
提案がなされてきた。昨年はゼミ生の
荒井さん、小橋さん、照沼さん、長谷
川さん、林さん、森さんの共同研究「追
浜『宝の地図』を創ろう！」を発表

し、今年六月、土木学
会の第一回公政策ア
ザインコンペで優秀賞
に輝いた。

内容は、工業地帯に
あるバイオガスプラン
トに着目し、現在廃棄
されている商店街から
出る生活垃圾を利用して
バイオガスをつくり、
その燃料で追浜の見所
を巡る観光バスを運行
させる「ゼロエミッシ
ン地域化計画」。その
バス運行に運動させて、
追浜をよりよく知るた
めの観光ツアーや計画
したのが「産業観光化
計画」。これは、近く
にあつても、一般市民
との接点がない企業や
研究機関を観光資源と
とらえて地域活性化に
つなげるものだ。さら
に歴史に埋もれ、廃棄
寸前の土木遺産の「第
三海堡」の保存、活用
案も盛り込まれた。そ

16号線の歩道整備の調査研究で行われたワークショップ

沿線住民、商店、歩行者を対象にアンケート調査を行い、交通量調査、現場調査を行った後、3回にわ
たってワークショップが行われた。その結果をまとめ、住民の意見として横須賀市へ提案を行った。



③ 事前につくった歩道図面に、個々の要望を貼って、より具
体的な意見の集約化をはかる

① 2回目のワークショップは、住民16名が参加。数班に分か
れて、それぞれ要望を書き出す

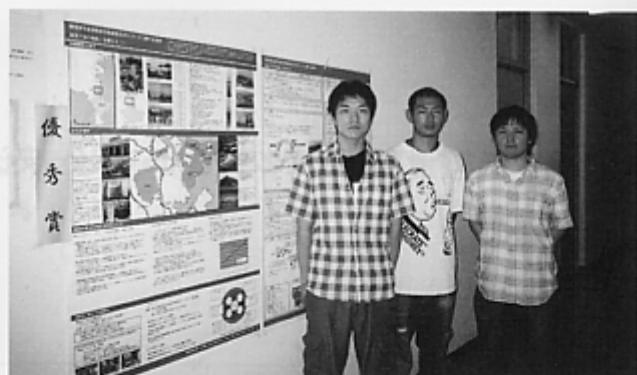


④ 歩道面とストリートファニチャーを分けた図面に、提案、
要望をまとめて発表する

② 各班の書き出した要望を集めて場所別に分類。意見の全体
を総覧する



今年のゼミでは、大学の前を流れる侍従川の再生をテーマに進められ、活発な討議が行われている



土木学会のコンペで優秀賞を受けた「追浜「宝の地図」を創ろう!!」のプレゼンテーションボード。左から小橋さん、荒井さん、照沼さん

して、住民のアンケートで要望の多かった丘陵地の住宅団地の交通手段に関しては、DRT (Demand Responsive Transportation) という新しい生活交通システムを提案。住民が低料金で利用でき、タクシー会社が利用者の拡大や企業のイメージアップにつながると想定している。さらにこの住宅地周辺に残る農地を有効に活用して市民コミュニティをつくる提案をした「湘南鷹取で「農」コミュニティ」も盛り込まれている。

追浜に軸足をおいて三年目。地域に関する知識の積み重なり、若い世代の感性や問題意識が、現実的なまちおこしビジネスをひねり出しだ。この提案をつくった荒井さんは、「ふだん見ることのできない地域の資産を実際に見て、体験できたのが、おもしろかった。住民の人たちに見てもらつて、この提案の意見を聞いてみたい」と話す。

そして昨年は、国道一六号線沿線に並ぶ商店街の電線地中化に伴う歩道整備のあり方に関する調査研究を、昌子研究室で行った。住民の意見をとり入れて歩道・景観整備を行いたい行政と住民とのパイプ役となつたのだ。一日の交通量調査から、沿道住民や商店主、

歩行者を対象にしたアンケート調査、具体的な歩道計画を示した三回にわたったワークショップなど、なるべくたくさんの意見を聞いて、住民が望む道づくりを模索。彩度は落とすが明度の高い舗面、まちのシンボルであるワインやあんずのサインを入れること、外灯の増設、バス停の屋根設置などの具体的な提案をまとめた。しかし実際にまちで調査をしていると、応じてくれる人も決して多くはなく、ワークショットに来る人も限られる。

研究の中心になっている大学院一年の山村明子さんは、「地域とのギャップを埋めるため、多くの人に関心をもつてもらうこと」が今後の課題という。橋だの、ダムだの、マクロなことに目を奪われがちで、小さなことに頼着しないような世界。しかし地域のまちづくりには、ハードよりソフトが必要となる時代である。「住民が求めるものは何か、まちに必要なものは何か、細かな部分を丁寧に拾い上げなくては、真に有効な策は見えてこない」という。専門家と地域が対等にコミュニケーションをとり、社会的なつながりを大切に考えながら、まちの活性化を探る昌子先生の姿勢は、これまでの土木のイメージを変え、可能性を広げているようを感じた。

「腰が低くて、笑顔が絶えない先生なんですよ」と昌子先生を評するのは、追浜こみゅに亭で販売を手伝う長野久美子さん。熱心でエネルギーのある行動が、商店街の関係者、住人、行政の意識を少しずつ変え、動かしてきた。昌子先生自身は、「どここの地域でも必ず機会がなくて埋もれているこうした人

取材=西山麻夕美(フリーライター)
イラスト=河合睦子